◆伊藤洋二　選　～山口素堂の俳句より～

朝かほハ其年の垣に盛哉

中国では朝顔を牽牛（けんご）、種子を牽牛子（けんごし）といい、種は生薬として用いられる。名前の由来は、高価であった種子が手に入ると謝礼として牛を牽（ひ）いていったところから来ているとも、あるいは牽牛星(彦星)から来ているともされる。年に一度の逢瀬、七夕の季節に咲く花、縁起物として鉢植えが好まれた。江戸時代のブームで品種改良が進み、黄色、黒色の〝変化物〟があったとか。

朝虹やあがる雲雀のちから草

ちから草は、イネ科の一年草、オヒシバの別名。雲雀は丈の低い草地を好み、原っぱや麦畑などに生息する。草の根元にお椀状の巣を作るため、イタチや猫、蛇や鴉が天敵となる。これら天敵が近づくと手負いを真似て遠ざかり雛を守る子煩悩な鳥。「雲雀の力」と「ちから草」と「ちから」を二重にかけた言葉遊びの句。

うますぎぬこゝろや月の十三夜

『旗本退屈男』は、市川右太衛門さん演じる早乙女主水之介（さおとめもんどのすけ）が主人公。トレードマークは、眉間の三日月型の〝天下御免の向こう傷〟。「退屈で仕方ない」が口癖だが、見事な剣術で悪人をこらしめるチャンバラ映画に、手に汗を握ったものである。小学生の頃の学芸会の演目は失念したが、舞台に立つ楽しさは、映画や劇に影響されていたのだろう。現在は、浪曲・虎造節の発表会や全国大会の舞台に立つが、虎造節は力を入れ過ぎない、観客が疲れない、うますぎない上手さが大事。

河骨や終にひらかぬ花盛

河骨（こうほね）は、スイレン科の水草で、ワサビ状の白いゴツゴツした根茎が人の背骨に似ていることが名前の由来とか。根茎は川骨（せんこつ）の名で漢方薬として用いられる。水中から花茎を伸ばし、黄色の花を一輪咲かせる。花言葉は「秘められた愛情」。ということは、秘められたまま、結局、成就しな

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

い恋のことを素堂は詠んでいるのだろうか。

さびしさを裸にしけり須磨の月

『源氏物語』は、紫式部が西国十三番札所石山寺にて起筆したとか。源氏二十六歳春～二十七歳春の、第十二帖「須磨」を読む。朧月夜との関係が発覚し、罪せられそうな気配を敏感に察した源氏は、先手を打って須磨隠棲を決める。親しい人々や女達との別れを悲しみながら京を後にする。須磨では、都の人々と便りを交わしたり絵を描いたりしつつ淋しい日々を送る。華やかな京の生活を離れ、侘しさは隠しようもない。百万文字に及び、五百名の人物と八百首の和歌を含む長編恋愛小説に、うぅ～んなるほど？　「楽しさを小出しにしけり後の月」。

谷川に翡翠と落る椿かな

翡翠は、日本の〝国石〟で、古くは祭祀用の勾玉に使われ、身に付けると長寿、健康が得られるとか。国内で加工された大珠は、人類初の翡翠加工の証であり、日本史で重要な石である。と書きかけて、この句の「翡翠」は石ではなく、鳥のヒスイ、カワセミのことだと気が付いた。俳句で翡翠（かわせみ）は夏の季語だが、意味からして鳥のことであろう。うっかり、勘違いであった。「転寝によだれと落ちる威厳かな」。

地は遠し星に宿かれ夕雲雀

雲雀は、上昇していく時、空中で停飛している時、降りてくる時で、それぞれ鳴き方が異なる。春から夏は、早朝から夕方まで〝上がり〟と〝空鳴き〟と〝降り〟の三通りを延々と囀り続ける。一日、鳴き疲れて何時しか空には星が。♪遠き山に日は落ちて　星は空を鏤めぬ　今日の業をなし終えて　心軽く安らえば　風は涼しこの夕べ　いざや楽しきまどいせん　まどいせん♪　（『家路』堀内敬三訳詩）。歩いて帰るにはもう遅い。乙女座の伯母さんの家に泊めてもらおうかな。

春もはや山吹しろく萵苣苦し

「萵苣」は、チシャと読む。レタス、サラダ菜と同じ仲間である。昔食べた苦

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

い〝カキチシャ〟の酢味噌和えが食べたくなった。近頃のレタスではどうもシャンとしない。種もみの塩水選をする頃、丁度山吹の花が枯れて白くなり、乙鳥が子育てに真っ最中、楠若葉が濃さを増し、新学級の新しい友達が遊びに来る頃でもある。

わすれ艸もしわすれなばゆりの花

「艸」は、並び生えた草の象形で、漢字の部首「くさかんむり」の原形。ワスレグサとは藪萱草（ヤブカンゾウ）のこと。ユリ科の多年草で、ワスレグサの名は、花が一日で終わると考えられていたことに由来。英語でも Day lily と呼ばれる。最近は、忘れようとする以前に覚えていられない。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。